NPO JCP
Japan Conservation Project

NPO JCP NEWS

No. 7

2003. 12. 20

・ご挨拶
・報告－茨城県美浦村大野雲外壁画保存事業支援プロジェクト
・世界の修復界は今－－台湾－－
・シリーズ 保存修復の現場から「仕事が技を研く」
・書籍紹介『油絵を解剖する』
・JCP 事務局通信

ご 挨 拶

かねてお知らせしておりましたように、当会の名称が11月11日より「特定非営利活動法人　文化財保存支援機構」と変わり、新たな出発をすることになりました。その節目にあたり、僭越ながら事務局よりご挨拶をさせて頂きます。

「文化財保存支援機構」と名乗るからには、「文化財」とは何か？　というところから考えなければならないのかもしれません。「JCPでは、『文化財』をどのように定義していますか？」始めの頃、こんなメールをいただいたことがありました。お返事しなければと思いつつ、ひとつの答えを出すことの困難さに、未だ果たせないままでいます。勿論広辞苑にも載っているでしょうし、文化庁のHPにも答えを探すことはできるでしょう。でも実は、この領域に関わる専門家になればなるほどそれぞれの見解を持っており、当会の理事間でも意見を統一することはできないと思われます。時代によってもその概念は刻々と変化しています。

個人的に私は、「文化財」とは、「忘れてはならない大切なもの」「失っては勿体ない大事なもの」ではないかと思っています。世の中は、壊してまた作っての繰り返しです。壊される原因は、自然災害であったり戦争であったり、事故であったり、内的外的要因による生活習慣の変化であったりします。壊れたらまた作ればいい、と思うかもしれません。私自身「創る」側に身を置く人間ですが、創作は無からは生み出せません。まずは自然から学ぶことに始まり、先人の蓄積があり、それらの滋養を吸収して新しい花は開きます。「受け継ぐ」「伝える」ことがあって初めて先に進んでいくことができるのです。だから「自然」同様、「文化財」も守っていかなければならないと思います。でも実は、もう随分私たちは「忘れてはならないもの」を失ってきたのではないでしょうか？

「忘れてはならないもの」「失いたくない大切なもの」を技術によって修復できる人たちがいます。科学によって保存していこうという人たちがいます。その周辺には、材料や情報を提供する人たちがいます。その周りを、一般社会が取り巻いています。でも、彼ら専門家の存在は、まだまだ知られていません。それどころか、絶滅危惧種に指定されそうな職種もあります。だからこそ、このNPOで、一般の方々と文化財保存／修復専門家を出会わせることにより、新しい支援の形を作っていくことが必要だと思うのです。

今後このNPOも、法人として責任のある、かつダイナミックな活動をしていかなければなりません。そのためには、川岸に立って舟を眺めるばかりでなく、一緒に乗って漕いでくれる人が何としても必要です。事務局としてやるべきことは、全会員の皆様のやる気をバックアップすることだと認識しています。

まずは舟に乗るところから始めませんか？

特定非営利活動法人　文化財保存支援機構
事務局　八木 三香

報告

茨城県美浦村

大野雲外壁画保存事業支援プロジェクト

平成15年9月、当会は茨城県美浦村から委託を受け、村にあった川岸屋旅館壁画の保存修理作業を行いました。初めての試みとして登録会員の中から技術者を公募し、１名の技術者、２名の補助員を決め、現地で作業に取り組みました。

○プロジェクト概要

美浦村にある陸平（おかだいら）貝塚は、明治12年に日本人の手で初めて発掘された貝塚で、縄文時代の遺跡として現在に至るまで数多くの調査が行われています。発掘が始まった当時から多くの考古学研究者が当地を訪れ、泊まった宿屋が川岸屋です。

川岸屋自体が一種のサロンという雰囲気の中で、大野雲外(考古学者／東大の人類学教室に雇われた画工でもある)がその旅館の一室の壁に縄文土器の文様を描き写しました。それが今回の壁画です。残念ながら川岸屋は既に廃業し、建物も十数年前には取り壊されてしまいました。その際、この地が考古学界の求心力を持った土地であったことを物語る資料として、壁画は取り外されて保管されていました。

この壁画は来年の春に新しくオープンする美浦村埋蔵文化財センターに展示される予定です。そのため、漆喰層を新しい支持体の上に固定して額装に改めることを目指しました。

修復作業の様子は、開始直後からホームページで詳しくお伝えしていましたので、見てくださった方も多いかと思います。ここでは作業に参加した会員に、現場での苦労話など語ってもらいました。

美浦村での日々を振り返って

増田久美(「大野雲外壁画保存事業支援プロジェクト」参加技術者)

９月２日、まだまだ残暑の続くなか茨城県美浦村で大野雲外壁画保存修復支援事業は始まりました。この日初めてメンバー４人が揃って顔を合わせましたが、これから１ヶ月近く仕事だけでなく隣接する宿泊所で生活を共にすることになります。公募で集まったメンバーですのでお互い未知の部分が多く、なかには全くの初対面の方もいて胸に一抹の不安を感じていたのは私だけではなかったと思います。

実際に作業が始まると初めこそ多少もたつきましたが、すぐに各人ペースを掴み動くようになりました。共同生活の方も自然に役割分担が出来て、問題の部屋割りも（エアコンの付いている部屋と無い部屋があったのです）あみだクジで公平に決まり、まずまずのスタートとなりました。

仕事場兼宿泊所となった陸平（おかだいら）研究所は周囲を田んぼに囲まれ、テレビやラジオも無い静かな環境にありました。移動手段が車しかありませんので、食事や買い出しに出掛ける以外は仕事が終わると食堂に集まり、HPの作成や漆喰補填材の試作をしながら一日の作業を振り返ったり、明日の予定を話し合ったりして過ごしました。お互いの専門分野の話になると話す方も聞く方もついつい時間を忘れて夢中になり、夜更かししてしまうこともしばしばありました。もちろんお堅い話だけでなく、若い頃の苦労話や笑い話、えっと驚く生活食習慣の違い等でも盛り上がりました。最初はどうなるかと思った共同生活でしたが、

陸平研究所外観

今振り返ってみるとこんなふうにしてお互いを知ることで、仕事にも良い影響があったのではないかと思います。

今回の事業ではそれぞれに異なる専門分野のメンバーが公募で集まり、即席チームを組んで仕事をしました。私自身は油絵修復が専門で漆喰壁に描かれた作品は今まで経験が無く、新しい分野を経験することへの期待と不安とがありました。それは他のメンバーも多かれ少なかれ同様に感じていたのではないかと思います。美浦村から元の日常に帰って数ヶ月が経った今、改めて振り返って思うのは多くの方々の支えがあって無事に修復を完了することが出来たということです。作業が円滑に進むようお世話下さった事務局の方々、現地で必要になった材料を迅速に用意して送って下さった方々、作業日程に合わせて急ぎの材料制作

をお願いした業者の方々もいらっしゃいました。見学会に来られた方々には美味しい差し入れと励ましの言葉を戴きました。そして特に会員の山本さんには丁寧な技術指導を戴き、どんなに心強かったかしれません。また５人目のメンバーといっても過言では無い程、毎日のように作業を見守って下さった美浦村学芸員の中村さんの存在が無かったら、この事業は随分困難なものになったと思います。発注側の理解と協力がいかに重要であるかを中村さんから学びました。この場をお借りして皆様に感謝申し上げます。NPOだからこそこのようなかたちでの事業が実現できたと思います。今後に繋がることを期待しています。

美浦村壁画修復プロジェクトに参加して

中右　恵理子（「大野雲外壁画保存事業支援プロジェクト」補助員）

美浦村は、茨城県の霞ヶ浦の近くにある静かな村です。霞ヶ浦という地名も、私には聞いたことがあるという程度で、まったくはじめて訪れる地でした。さらに、合宿生活をしながらの修復作業というのもはじめての経験で、文字通り期待と不安に胸を膨らませつつ、現場へと向かいました。現場に向かう前、刈り取った稲の穂先が風で飛んできて衣類につくと、人によってはアレルギーになる、とか、宿舎では蛙や蛇が出るなどと聞き、やや不安が増大したのですが、アレルギーにもならず、蛇は見ませんでしたし、蛙は大変かわいらしいもので、なかなか快適な生活だったように思います。ガガンボがいつも周りを飛び回っていたことなども今では懐かしい思い出です。ひとつ不思議だったのは、宿舎のトタン屋根が、夜ペタンペタンと音を立てていたことです。不思議といえば、宿舎の部屋割りを最初にあみだくじで決めたのですが、部屋割りを変えようとして２度目に行ったあみだくじで、まったく同じ結果が出たのも不思議でした（それきり部屋は固定になりました）。

美浦村には陸平貝塚があり、修復を行った建物も、「陸平研究所」という名称でした。ここには土器や貝殻がたくさん保管されており、修復はその一隅で行われました。この陸平研究所には、私たちがお世話になった学芸員の中村さん指導のもと、地元の方々が頻繁に集まって縄文土器のレプリカ作りなど、さまざまな活動を行っていらっしゃるようでした。

中村さんが石皿作りに挑戦されている姿を拝見したり、最後には、縄文土器の拓本作りを教えていただいたのも楽しいオプションでした。

中右恵理子さんプロフィール
- 1965年　東京都生まれ
- 1988年　法政大学卒業
- 1991年～1997年　イタリア留学
- 2003年　東京芸術大学大学院文化財保存修復油画科博士課程修了
- 2003年4月からフリーで活動

文中※の付いている言葉は、巻末に用語解説があります。

最後になりましたが今回のメンバー、大林さん、中右さん、奈良さんにお礼申し上げます。仕事と生活を共にして多くのことを勉強させて戴きました。また一緒に仕事が出来る機会があることを願っております。

増田久美さんプロフィール
- 1968年　静岡県生まれ
- 1993年　創形美術学校卒業
- 1993～2001年　創形美術学校修復研究所（現修復研究所21）所属
- 2002年より　フリーにて活動

陸平研究所　宿泊施設

解体作業

壁の中塗り層除去後、漆喰層の上に浮かんだ人の顔のような補填材のあと。カベゴンと命名されました。

修復作業では、伝統的な日本の漆喰壁に描かれた壁画を修復するという、大変貴重な機会を与えていただきました。以前、日本家屋の建築の現場を訪れた際、木舞（こまい）※1に縄をかける作業をほんの少しやらせていただいたのですが、そのとき目にした材料が断層となって壁画の切断面に見えていたのが、深く印象に残っています。私にとっては新たな素材ばかりでしたが、なかでも、漆喰の持つ奥の深さには苦労しました。漆喰については、これからも機会を見つけて学びたいと思います。

陸平研究所の周りには、田んぼが広がっており、台所からの景色はとても開放的で気持ち良いものでした。作業が終わりに近づいた頃、ふと気がつくと、稲が刈り取られて景色が変わっており、普段の生活でそれほど明確に季節の変化を感じることは少ないので、ちょっとした感動でした。

壁画の描かれていた当時の旅館のお話をうかがったこと

(子供の頃、水遊びの後の昼寝の部屋にされていたそうで、退屈しのぎに壁にボールをぶつけていたそうです)、土器のレプリカ作りに参加されている方々が興味深げに壁画を見に来られたことなど、地元の方々と交流を結びつつ、作業を進めていったことも、現場での合宿ならではのことだったと思います。今回、このような貴重な機会を与えていただいたNPO JCPの皆様に心からお礼を申し上げます。

はじめの一歩

奈良　真一(「大野雲外壁画保存事業支援プロジェクト」ボランティア)

陸平遺跡にて
左から　竹内朋世さん、竹内進一さん、奈良さん、中右さん、増田さん(すべて登録会員)

自分は、今年の７月に職場を退職し、現在、東洋絵画の修復技術を学び始めたところです。まずは、どこか修復の現場で経験を積める場所を、と探していたところ、NPO JCPのホームページ上で美浦村壁画修復プロジェクトがあることを知り、地元の茨城県ということもあって、早速、作業補助員に応募しました。

このプロジェクトでは幾つかの画期的な点があったと思います。まずは、担当者を公募という方法で選び、そのメンバーも、装こう・油画修復の技術者、研究者などが分野を越え、協力して行うといったバラエティー豊かなもので、自分にとっては、知識や仕事の進め方一つとっても、いろいろと得るものが大きかったです。修復の工程についても、その日のうちにJCPのホームページへ画像も併せて更新するよう努めました。また、現地説明会もおこない、会員の方や地元の皆様にも、この壁画の来歴や保存修復の手順等を知っていただく機会を得ることができました。

実際の修復に関しては、現場仕事ということもあり、屋内ながらも気候や温度が刻々と変化する中、工具や材料を試行錯誤しながらの作業となり、目からウロコの連続でした。更に、息を詰めるような繊細な部分と同様に、プロジェクトを遂行する上での段取りというものが、とても大切であると身にしみて理解できました。

また、期間中には、修復の最前線で働いている方々とお話しする機会にも恵まれました。中でも、ある方から「これから修復家を目指すのであれば、一つの事業をマネジメントできるような能力が大切である」というアドバイスをいただくことができました。それは、来年から大学院で文化財の保存修復について学ぼうと考えている自分にとっては、研究テーマを定めるうえで格好のヒントになりました。

ほぼ１ヶ月にわたり現地の陸平研究所に宿泊し、自炊しながら作業を続ける中で、地元の方々との温かい交流もあり、この壁画は地域にとって深い意味があるのだと実感することが数多くありました。

今の日本では、国宝・重要文化財については国の予算で修復が可能ですが、未指定品の文化財に関しては、所有者の方が悩みを抱えているところが多いと聞きます。修復そのものが、何かを新しく生み出す行為でない以上、所有者も、なかなか修復にまでは費用をかけようとしないため、公的な資金に頼らざるを得ないのが現状です。そこで、今自分は個人的に、文化財指定の価値付けにかかわらず、所有者にとって大切なものの保存・修復事業を、資金を調達しバックアップするための「地域文化財　保存修復基金」の設立準備を始めたところです。

最後になりましたが、美浦村やJCP事務局の方々には、本当にお世話になり、ありがとうございました。これからも、このような機会がありましたら、積極的に参加し活動していきたいです。

完成！
左から、中右さん、増田さん、大林さん、奈良さん

奈良真一さんプロフィール
- 1974年　茨城県生まれ
- 1996年　行政書士資格取得
- 1997年～2000年　埼玉県庁勤務
- 2000年～2002年　外務省に出向
  在フィリピン日本国大使館　副領事
- 2003年　埼玉県庁を退職

世界の修復界は今　第5弾　台　湾

林　煥盛　㈱宇佐美松鶴堂

「台湾の文化財保存／修復事情」

台湾で文化財の保護に関して指導管理しているのは文化建設委員会（略称：文建会）です。その下に「国立文化資産保存研究中心籌備處」（台南にある）という組織を設置しています。文化資産保存研究中心籌備處は日本で言うところの文化財研究所に当たりますが、この組織の最近の主な事業はお寺の建築彩絵の保存修です。これは国際交流として日本側の補助金（豊田財団と文化財保護振興財団）を受け、NPO JCP及び元興寺文化財研究所の技術協力を得て取組んでいます。海外の文化財関係団体と強く連携するのは、台湾の修復界のひとつの大きな特徴です。特に日本側は台湾の大地震後、復興事業として修復作業に協力していますが、その中で日本における文化財修復における理念や技術などを伝達し、様々な面から台湾の修復界に影響を深くしています。

台湾における文化財は、大きく分けると時代的に次の三段階に分類されます。

1895年以前：　清国やオランダによる殖拓時代の文化財。
1895年から1945年まで：　日本による殖拓時代の文化財
1945年以降：　中国からの文化財

日本殖拓時代の文化財は、最近主な修理事業対象となっています。これに対して日本側の支援と協力が期待されています。

博物館における修復の現状は、民間にある工房で委託修復を行うのが一般的です。台湾の地元の工房は勿論、日本・京都の宇佐美松鶴堂・東京の半田九清堂・創形修復研究所なども修復を依頼されたことがあります。これに対し、図書館と公文書館は製本関係を含む修理作業が多いため、館内で工房を持っている場合が多いようです。また博物館の中でも故宮博物院は、修理に関して各自の部門によるそれぞれの工房を設置し、作業を行っています。絵画・書蹟などは「書画處」、文書・書籍などは「文献處」、陶磁器・金属類などは「器物處」においてそれぞれ修理を行います。「科技室」は博物館の環境に対して総合的な科学分析を行うのが主な業務です。

学校で修復を専門として教えているのは台南芸術学院と雲林科技大学です。

民間団体で修復事業を掲げているのは宗教団体の保安宮及び財団法人の樹火記念紙文化基金会。保安宮は長年継続してお寺の建築を修復しており、2003年国連の文化遺産保護項目の賞をもらったそうです。樹火記念紙文化基金会は紙工房と研究所を持っており、修復に関して中性紙や補修紙などを研究して作成し、台湾のPaper Conservatorを集めて紙の修復に関してセミナーをよく行っているそうです。

林　煥盛さんプロフィール
・1963年　台湾屏東生まれ
・1994年　国立台湾大学文学部大学院中国美術史修士取得
・1994年　㈱宇佐美松鶴堂入社
現在に至る

保存修理の現場から

（インタビュアー：八木三香／三浦功美子）

「仕事が技を研く」

選定保存技術表装建具製作　山岸　光男さん

山岸さんは、表装建具（ひょうそうたてぐ）と言われる屏風や襖（ふすま）、額（がく）、衝立（ついたて）などの下地骨（したじぼね）※2、縁木（ふちぎ）※3、掛け軸の軸木※4などを作る職人です。屏風や襖の出来映えは、表具師の腕もさることながら、狂いのない丈夫な下地が命です。山岸さんの建具は国の指定文化財の修理に多く用いられ、平成八年に文化庁の選定保存技術者に認定されました。

建具製作への道のり

西武新宿線新井薬師の駅から道を北に行くと、その名もゆかしい哲学堂公園があります。その公園の北側をめぐる道路沿いに、山岸さんの工房はありました。

12月のある日、インタビューに伺うべく１軒１軒訪ね歩いて

いると、サッシの内側に材木が所狭しと立て並べられている家があり、その材木の間を行き来する山岸さんの軽やかな足取りが見えました。

サッシを開けて招じ入れてくれた山岸さんは、小柄ながらにきびきびとしていて、大きな目が印象的な方でした。工房の中へ入ると、周囲に立てられた杉、檜の材木がほのかな香りを漂わせ、壁には夥しい種類の鉋、鋸……。外には車の音がひっきりなしに聞こえますが、工房の中はなぜかホッとする時間が流れ、懐かしい気分になりました。

お客さんが職人を育てる

山岸さんは、始めから表装建具制作を目指したわけではないと言います。

山岸さんが尋常小学校高等科を卒業したのは昭和21年。第二次世界大戦の敗戦直後、失業者があふれていた時代でした。最初地元の木工所に就職した山岸さんは、算数が得意だったこともあり、木取りの巧みさや木の挽き方などが監督の目に止まり、日給が１年間の間に5倍近く上がったそうです。やはり当初より才能があったということでしょう。そうこうしている内に母親同士が知り合いだった関係で、表具建具師鈴木初太郎さんに出会い、腕を見込まれ、東京へ出て鈴木さんのもとに弟子入りしました。昭和22年、山岸さん15歳、運命的な出会いでした。

昭和25、6年が仕事のピークでした。親方の鈴木さんは一流の表具師を顧客としており、厳しい目を持つ者同士、刺激し合って質の高い仕事をしていました。

「昔はお客さんが職人を育てたものです。こだわりを持って、職人と対等に渡り合うお客さんがいたんですよ」

ある時長巻の巻物を作る注文を受けた表具師から、親方が幅60cm、長さ4mほどの盤板(ばいた)※5を頼まれ、山岸さんが製作することになりました。一本の木から取った長さ2m厚さ3cmの板を縦に2枚接いで１枚の場板※とするのですが、表具の裏打ちに使用する盤板は表面に少しでも凹凸があっては使い物になりません。中央の組み合わせ部分をいかに平らにするかが問題でした。ジョイント部分は小口を削って凹凸を作り、組子にするのですが、接げたときに少しでも角度がついてしまうと4mの先端は大きく傾くことになってしまいます。手技で凹凸を削り、2枚の板が吸い付くように組み合わせ、しかも4m先まで曲がらぬように真っ直ぐに接ぐというのは、想像するだけでも神業に近いものです。これを山岸さんはわずか5日で仕上げたそうです。寸分の隙間なく接げられたジョイント部は、表具の裏打ち作業で水を含むと膨張し、よりしっかりと固定されます。乾燥すればまたジョイントをはずすことができ、2mの長さに分けて保管できるというわけです。

親方の鈴木初太郎さんは人間的に大変魅力のあった人で、仕事以外でも影響を受けることが多かったと言います。その親方は昭和34年病いに倒れ、山岸さんは昭和38年に独立しました。その後重要文化財「悲母観音」（狩野芳崖筆／東京芸術大学蔵）や国宝「雪松図屏風」（円山応挙筆／三井文庫蔵）など、多くの文化財の表装建具を制作し続けています。

状況はきびしいです

現在修復を支える材料生産者の置かれている状況は非常に厳しいものがあります。

「最近はいい材料が手に入りにくくなって……」立てかけてあった角材を示しながら、山岸さんは嘆きます。「これは先日注文して届けられた材木なんだけど、乾いてないので使い物にならない」手を触れると、確かにしっとりとしていてまだ水分を含んでいます。林業者が木を伐採する本数が減ってきているため、材木屋さんがストックを置かなくなってきており、注文に応じて調達しようとしても、急には良いコンディションの材料が手に入らないとのことです。

この背景には、やはり時代の波が影響しています。高度成長期、バブル期を経て土地の値が上がり、建築にお金をかける余裕がなくなってきました。家族構成の変化も家の造りを変えていきました。和風建築の広い家を代々守るより、新建材の集合住宅や一戸建てに人気が集まり、天然木の需要そのものが減ってしまったのです。以前は木芯部の堅い赤みの部分を建築用部材として使い、その周りの柔らかい部分を建具の骨として使うことで、１本の木から無駄のない使い分けが出来、採算を取ることが出来ましたが、いまや建具用の白太部分だけを取るために木を切ることは、とてもコストが掛かって出来ないのです。

こうした建築様式の変化はまた、家の中から伝統的な襖や障子を追放し、替わって安価な建具が機械生産されるようになったために、職人の腕が顧みられなくなる風潮も生んでいます。「手技を覚えている人間が機械でものを作ることは簡単でにできる。でも機械しか扱ったことのない人間が、手作業でものを作ろうとしてもできるものではありません」と、山岸さん。

今、山岸さんにも通ってくるお弟子さんが一人いるそうです。「しかし仕事がなければ腕は上がらない。次から次へと来る仕事をこなしてこそ技は研かれる。ひとつ仕事を終わって、またしばらく仕事をしない。そんな状況では腕は上がらないのです」

材料生産者の育成は焦眉の課題と言われていますが、お話を

○山岸光男さんプロフィール
- 1932年　埼玉県生まれ。
- 1947年　鈴木初太郎氏に弟子入り。東京都新宿区牛込、鈴木美術木工所にて修業を積む。
- 1963年　独立。東京都新宿区富久町にて開業。
- 1996年　文化庁より文化財選定保存技術保持者として認定される。
- 1964年　東京都中野区江古田に工房を構え、現在に至る。

伺うと現実は厳しいとつくづく感じさせられます。家族形態の変化や文化の移り変わりそのものをどうすることもできません。しかし、本物を求める人が一人でも多くなれば、こうした方々がもう一度脚光を浴びる日が来るのではないでしょうか？　機械は再生産できても、一度途絶えてしまった人間の技術は再生産できません。

最後に25年前に作ったという額の下地骨を見せて頂きました。気持ちの良いほど直角に組まれた骨組みに、別材でスライド式の小さな留具（サルコ）が組み込まれており、スライドさせるとピシッと小気味良い音を立てます。これもお客さんの注文で、音がするように緩みなく作ってくれと言われたそうです。見ているだけで背筋がのびる感覚がありました。

今私たちの生活に一番忘れられているのは、この感覚かもしれない……。帰りの電車の中で、しどけなく座り込む若者達を見ながら、そんな思いにとらわれました。

用語解説

※1 **木舞**：壁の下地に組み渡す竹または木。

※2 **下地骨**：屏風や襖の芯となる骨組み。杉白太を格子状に組んで製作する。屏風や襖は、この下地骨の上に下張りの和紙を何層にも重ねて貼り込み、一番上に本紙（絵や書が描かれた作品）を貼って仕上げる。

※3 **縁木**：屏風や襖の周りに付いている木の縁。通常漆を塗ってある。

※4 **軸木**：掛け軸の下に付いている棒状の木。

※5 **盤板**：主に表具師や装こう技術者が使用する作業台。一般的に90cm×180cm以上の面積のものを使用する。その上に本紙の紙や絹を広げて作業するため、表面が大きく、かつ平らであることが特に求められる。

書籍紹介

『油絵を解剖する－修復から見た日本洋画史－』

歌田眞介・著　NHKブックス・2002年1月30日発行・定価：1,020円＋税

本書は、長年洋画の修理に携わり、また高橋由一の技法の研究者として科学的な調査を進めてきた著者だからこそ出来る、いわば絵の裏側から展開する日本の洋画論、技法論である。

日本の洋画史において、その先駆者の一人である高橋由一と変革者である黒田清輝は、常々比較されるべき巨人である。国粋主義の風潮の中で冬の時代を迎えた洋画家たちは、明治22年に明治美術会を結成して自らの地位の確立等を目指した。晩年を迎えていた由一は中心的な役割は果たさなかったが、多くの弟子達によって会は発展を遂げつつあった。そんな中、明治26年に帰国した黒田清輝らによってもたらされた「外光派」もしくは「新派」の画風は、その後の洋画界を席巻することになる。

明治29年の黒田らによる「白馬会」の結成。明治34年の明治美術会解散と浅井忠らによる太平洋画会の結成という動きの中、明治の洋画壇は黒田ら外光派の勝利することなり、由一の流れを汲む明治美術会は「脂派」「旧派」のレッテルのもと、反主流派になっていった。近年、やっと再評価がされつつある。

著者は今までの「表面から見た」技法論ではなく、修理を通して得た技法論を展開する。絵具層の堅牢性や、素材に対する知識・研究を通して論じていく。例えば、シルバーホワイトとジンクホワイトの問題、表現を優先するがゆえの絵具の扱いの変化、黒田による模写の否定等。その中で著者が得た結論は、ある意味今までの美術論をひっくり返すインパクトを持つ。

石油系の弱い溶剤に溶け出す黒田の油絵と、漆のような堅牢さを持つ由一の油絵と、どちらが正当なものなのだろうか。表現のために絵具をどう扱ってもいいという「甘えの構造」が、日本の洋画にもたらした罪とは。和洋の特質を把握した、新しい表現に至らない原因とは。著者は、修理を通して実感した事柄として語っていく。

現在の美術大学の油絵科の学生で、油絵を描いている人はほとんどいない。私見ではあるが、美大は優れた油絵の画家を育成する機関とは言えなくなりつつある。当然異論もあるところだが、その遠因をどこに求めるべきかは、本書が示唆するところである。一読に値する書籍だと思う。

最後に、私がこの本で一番心に残った言葉がある。著者の問いかけに対する岩田栄吉氏の言葉である。

「日本にルーブルがありますか？」

（嶋根　隆一）

ＪＣＰからのお知らせ

○*手漉和紙青年の集い２００４東京大会*

日　時：2004年6月25日（金）～27日（日）
会　場：日本青年館（千駄ヶ谷）（仮）
趣　旨：全国の紙漉き青年を核とし、和紙の作り手・売り手・使い手など和紙を取り巻く様々な立場にあるものたちが一堂に集い、手漉き和紙の存続・発展に向け、情報交換や討論等を行う。市場を学び、今後の需要拡大を目標として、手漉き和紙をどう位置付けるかを探る。同時に展示会・講演会・ワークショップ等、和紙の普及を図る企画も複数開催し、東京から和紙の情報発信を行う。

○*「手漉和紙青年の集い２００４東京」サポートネットワーク*

上記東京大会を支援する目的でネットワークが組織されました。(略称:和紙ネット東京)同ネットワークでは、支援金の募金、ボランティアの募集などを行っています。
連絡先:和紙ネット東京事務局
〒158-0093
東京都世田谷区上野毛4-1-3　上野毛マンシオン1F
きたみ工房気付
TEL/FAX：03-5707-0937（12:00～19:00　日・月は定休）

○*NPO JCP NEWS編集部からのお願い*

NPOJCP NEWSでは、できるだけ分かり易く、幅広い話題を取り上げて皆様にお届けしたいと思っています。現在編集担当者が東京に集中しているため、どうしても地域の話題が偏りがちです。全国に散らばる会員の皆様。身近な文化財に関する話題をお寄せ下さい。

①講演会、講習会、ワークショップ、展覧会情報など：
タイミングもありますがメールマガジンも合わせて、なるべく沢山の情報をご紹介していきたいと思います。

②出版物の情報：
誌面で紹介してほしい本があれば教えてください。書評を添えてくださっても結構です。

③文化財関連Q & A：
専門用語について教えてほしい、文化財のここが知りたい、初心者向けに優しく解説してほしい……どんなことでも結構です。それぞれ専門分野の会員に答えてもらい、誌面で紹介していきたいと思います。

④編集記者（ボランティア）の募集
NPOJCP NEWSの編集に参加してみたいという方、ご応募下さい。
一緒により豊かな誌面作りをしてみませんか？フットワークの軽い方募集します。

※上記、情報提供、ボランティア応募連絡先は、以下まで、メールかファックスにてお願いいたします。
TEL/FAX：03-5363-4533
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org

ご入会ありがとうございました。

（平成15年12月20日現在入会者数）

□理事　6名　　□運営会員　14名
□登録会員　110名　　□一般会員　111名
□賛助会員　17件

㈱宇佐美松鶴堂
㈱岡墨光堂
(財) 元興寺文化財研究所
京都造形芸術大学
　歴史遺産研究センター
(有)坂田墨珠堂
昭和不動産
靖斎文化財保存研究所
日本通運株式会社美術品事業部
羽生　卓史
㈱半田九清堂
百元　節
フレンドトラベル
文化財保存
溝川商店
他個人3名
（アイウエオ順・敬称略）

ご寄附をありがとうございました。

・佐藤　隆明様　　・根本則男様

NPO JCPの活動に参加してみませんか？

□ **登録会員**：年会費　7,000円
文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。
登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で,文化財に直接関わる専門家とは限りません。

□ **一般会員**：年会費　5,000円
この法人の目的に賛同し、支援する個人。

□ **賛助会員**：年会費　一口50,000円
この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

会員特典　・季刊情報誌の送付
・講演会／研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、下記のファックス、お電話、メールにて申し込み用紙をご請求下さい。おり返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申し込みができます。
TEL/FAX：03-5363-4533
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org
URL:www.jcpnpo.org
※この他にも、随時寄附を受け付けております。下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用下さい。
・郵便振替　00120-4-10545　NPO JCP
・みずほ銀行　根津駅前支店　普通預金　1727893

NPO JCP NEWS
第7号
2003年12月20日発行
特定非営利活動法人　文化財保存支援機構
〒160-0008
新宿区三栄町6番地　小椋ビル403号
TEL/FAX：03-5363-4533
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org
URL: www.jcpnpo.org

〈理　事〉
三輪 嘉六(理事長)
大林 賢太郎(副理事長)
増澤 文武
白井 久明
伊原 惠司
谷　久光(事務局長)

〈評議員〉
三輪 嘉六
増澤 文武
伊原 惠司
三浦 定俊
田畔 徳一

〈編集協力〉浜名　純(牧童舎)・嶋根 隆一・三浦 功美子
〈事務局〉谷 久光(事務局長)・八木 三香(総務部長)
松本 洋子・三浦功美子